

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00287

研究課題名(和文) 19世紀日本文学史における仮名垣魯文の史的位置に関する研究

研究課題名(英文) A Study on the Historical Position of Kanagaki Rowon in the History of 19th Century Japanese Literature

研究代表者

高木 元 (TAKAGI, Gen)

法政大学・国際日本学研究所・研究員

研究者番号：00226747

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、明治維新という政治経済構造の変革に則して、近世(江戸時代)と近代(明治時代以降)とを分断して記述されてきた日本文学史を、この期を通じて活動した仮名垣魯文の文業に着目しつつ、十九世紀という時間的枠組みに拠って通史的に記述し直すことにあった。とりわけ、従来等閑に付されていた報条(引札)や浮世絵の填詞(解説文)など「非文学的テキスト」の調査蒐集に努めた結果、魯文の維新时期を跨いだ文業を一定程度明らかに出来たものと思う。

研究成果の学術的意義や社会的意義
相変わらず「古典」と「近代」とが分断されている日本文学史の認識を、文学的営為から見れば訂正すべきだと指摘し続けてきた意義は存すると思う。ぜひとも、中等教育の「国語」という制度や、大学入試での見直しにまで波及してほしいと願うものである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to reexamine the history of Japanese literature, which has been divided into early modern (Edo period) and modern (Meiji period and after) periods in accordance with the political and economic structural changes of the Meiji Restoration, by focusing on the "non-literary texts" of Kanagaki Rowon(仮名垣魯文), and to reexamine them in a chronological framework of the 19th century. In particular, I believe that I was able to clarify to some extent the roles of Rowon(魯文) across the period of the Meiji Restoration as a result of my efforts to investigate and collect "non-literary texts" such as houjyo(報条) and ukiyo-e filler words(填詞), which had been neglected in the past.

研究分野：人文学

キーワード：仮名垣魯文 鈍亭魯文 19世紀文学史 近世日本文学史 近代日本文学史

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

現在に到るまで、夥しい日本文学史が記述されてきた。これらのほぼすべての文学史は明治維新で劃期して、江戸時代を前近代として近世とし、明治以後を近代とする発展史観に基づいて記述されてきた。

そもそも「近世文学史」「江戸文学史」「明治文学史」などという用語自体が、政治体制の変化に即した時代区分を前提としたもので、近世と近代との継続性には無関心であったことを示している。21世紀に入った現時点においては、明治・大正・昭和・平成・令和という天皇の在位に基づく和年号による時代区分が、文学史に有効な時代区分ではないことは明確であろう。つまり、天皇の代替りや政治体制の変化は、それ自体が直ちに人々の読書生活に直接的な影響を与えるものではなかったのである。

一方、19世紀という西暦を枠組みとする文学史の考え方は、既に岩波講座「日本文学史」（1995～1997、岩波書店）において世紀による時代区分が導入され、幕末維新时期を10巻「一九世紀の文学」、11巻「変革期の文学 III」として編まれており、この企画自体が劃期的であった。また、その後、『近世文学史研究』（2017、ペリかん社）も、17・18・19世紀と区切って第1～3巻としている。つまり、西欧の文学史の如き世紀に拠る時代区分は、それなりの合理性を保持しているものと思われる。

研究史的な観点から見れば、19世紀末（幕末開化期）の文学に対する従来の評価は、不当に低すぎたと思われる。例えば「見るべき作家も登場せず、エログロナンセンスに成り下がっていた」という記述は、従来の文学史や辞書類の記述に一瞥を与えれば枚挙に暇がない。考えてみれば、これらの文学史や辞書を執筆してきた世代の近世文学研究者たちにとっては、近世文学という分野自体が、古典研究として認知される以前の「近世小説など国文学研究の対象にはならない」という強固な桎梏（アカハラ）が存したという時代背景は十分に理解しておく必要はある。つまり「文学的価値はないが……」というのは、彼等の用いた苦し紛れの建前であったと解すべきであろう。弁解しつつ研究を継続した先人たちの努力に拠って、近世文学が国文学研究の一領域として認知されるようになったという研究史は軽んじてはならないであろう。だが、それでも、我々は今その不適当な位置付けや発展史観に基づく評価を糺して措かなければなるまい。

ところで、仮名垣魯文に関する研究は、近代文学の濫觴と見做された『安愚楽鍋』など、文学作品（小説）に集中してきた。しかし、魯文が書き遺したテキストは、報条（引札）や浮世絵の填詞（解説）など、実に雑多で非文学的な著述が圧倒的に多く、全体像を見通すためには、此等の魯文の文業について網羅的な蒐集と整理とが不可欠である。

嘗て、2004～2007年度に実施された科研の共同研究「原典資料の調査を基礎とした仮名垣魯文の著述活動に関する総合的研究」では、非文学的資料の調査も試みられたが、残念ながら網羅するには到らなかった。

2. 研究の目的

研究の最終的な目的は、明治維新という政治経済構造の変革に則して近世（江戸時代）と近代（明治時代以降）とに分断して記述されてきた日本文学史を、19世紀という時間的枠組みに拠って通史的に記述し直すことにある。

そこで今回は、特に幕末維新时期を通じて広汎な著述活動を続けた仮名垣魯文に注目して、特に従来は等閑に付されてきた非文学的テキストを中心に、資料調査とその蒐集を試みた。尤も、前述の共同研究終了後も継

続して資料の調査蒐集に努めてはきたのであるが、本研究で集中的に調査蒐集に努めることが出来た。結果的に、魯文の生涯にわたる著述活動の様相を総合的に明らかにし、それを通じて、近世と近代とを連続させた19世紀日本文学史構築への見通しが切り拓けると思われるのである。

以上述べてきた如く、本研究計画では、近世と近代を継続的に記述する19世紀文学史という未成熟な研究課題と、その研究史的背景とを踏まえた上で、まずは個別に調査発表されてきた魯文の実に多様な行跡を再確認した上で、可能な限り増補しつつ総合的体系的に再編成することにより、魯文研究に着目した19世紀文学史の記述に資すべき基礎資料を作成することを目指した。

3. 研究の方法

魯文の著作物については、大雑把な分類整理を試みたことがあるが、改めて魯文の遺した仕事を分類しつつ、現状を整理してみる。

- | | |
|-----------|----------------------------|
| 1. 切附本 | 安政期の鈍亭時代を主として粗製濫造された廉価な抄出本 |
| 2. 艶本 | 慕々山人の名で書かれた習作で、著名作の改変作が多い |
| 3. 合巻 | 抄録もの、短編読切、長編続物、明治期草双紙など |
| 4. 時事 | 瓦版や、疫病災害のルポルタージュ『安政見聞誌』など。 |
| 5. 浮世絵の顛詞 | 揃物が多いが、興行案内、引札風のもの、異国ものなど |
| 6. 端唄・都々逸 | 歌澤節が多いようであるが、俗曲集の編著 |
| 7. 画譜・絵手本 | 多くの序跋を執筆している |
| 8. 報条引札 | 大多数が散佚、貼込帖などに残存する |
| 9. 滑稽本 | 『西洋道中膝栗毛』『安愚楽鍋』など |
| 10. 近代風俗本 | 花柳本、割烹案内などの序跋 |
| 11. その他 | 新聞記事（雑報）、俳諧、狂歌など |

この他にも、「稿本」のまま遺された資料、引札の手稿、書簡などが在り、さらなる博搜が不可欠であった。

既成のデータベースなどを使用しても、多くの筆名を使用していることから単純に「魯文」というキーワードからは検索できないケースが多く、また、摺物や俳諧狂歌集、画譜や絵手本なども序跋者が記述されているデータベースが少なく、未見資料の博搜にも手間暇が掛かった。

とりあえず、国内外の各機関で所蔵を確認できる貼込帖や冊子体に合綴された浮世絵などを片端から実見した上で、地道に所収する資料の細目を確認していった。

魯文の著作の方法的な特色は〈抄録〉に存する。例えば切附本『英名八犬士』は『八犬伝』の抄録本であるが、原本の文字通りの「切り貼り」により本文を抄録していることや、後印本に到る諸板書誌調査を通じて、『里見八犬伝』という明治19年刊の改題改竄本（作者名を「馬琴」と改竄し、口絵を描き替える）として求板されていることが分かった。この事例も、近世から近代へと、板本という同一のメディアとして継続的に出板され享受されてきたことを示している。

一方、『安愚楽鍋』で舞台となった牛鍋屋は、口絵に描かれた店頭の暖簾や、店内の焜炉に「日の出」と書いてあることから、実在した「日の出」という店であったことが分かる。実は、この『安愚楽鍋』を執筆していた時期に、魯文が書いた複数の報条引札が見出されたことから、『安愚楽鍋』は「日の出」とのタイアップであった可能性があると推測できる。このように、単に非文学的であるとして等閑に付されてきたテキスト群の

蒐集整理のみならず、魯文の執筆環境やその実相の解明を通じて、全体像を明らかにすることが肝要なのだと考える。

以上、本研究計画は魯文の著作という個別資料に関する調査だけが目的ではない。非文学的なテキストや、小説などでも後印本や活字翻刻本さらには注釈本にも目を配った上で、それらの相互的な関係を明らかにし、その成果を踏まえることに拠って、近世と近代との連続性を見るという、きわめて独創的な 19 世紀日本文学史を記述することが可能なのである。

4. 研究成果

まずもって、2021～2022 年度はコロナ禍の影響で、資料を所蔵している機関を訪問しての書誌調査をすることが全くできなかった。2022 年度末になって、やや事態が改善してきたので、天理図書館や東京女子大学、三康図書館、京都女子大学、京都大学などを歴訪して、所蔵資料の原本を実見しての調査ができた。とりわけ、知られている残存部数が少ない『新版滑稽三太郎話』の諸本について、「国書データベース」(国文学研究資料館)に未載の現物に就いても書誌調査ができたことは成果であった。

また、コロナ禍が収まった後でも、極端な円安と航空運賃やサーチャージの高騰で、予定していた海外資料の調査は、唯一カリフォルニア州立大学バークレイ校蔵三井文庫の調査のみで終わってしまった。海外の諸機関に所蔵されていることが分かっていた資料の多くを、実見できずに終わった点は残念であった。

一方、従来から継続してきた調査成果資料の整理をすることができ、そのデータを踏まえて、加速度的に公開が進んでいるオンラインでの画像資料を参照しつつ、ほぼ、所在の知られている資料に関しては、その全体像の把握ができことは本研究の成果である。しかし、魯文が書き残した資料は既に散失してしまったものが多いと思われるが、錦絵の填詞や引札のみならず、演劇関係資料にも、幕末維新期の俗語なども見出せることが分かった。

例えば、報条(引札)は一枚だけで所蔵されていることは滅多になく、多くは貼込帖(スクラップ・ブック)に貼られていることが多い。例えば、一橋大学附属図書館蔵『奎星帖』は 45 冊と大部のものであるが、多くの魯文の報条が遺されていることを柏崎順子「一橋大学附属図書館蔵『奎星帖』紹介」(『書物・出版と社会変容』第 4 号、2008)で知り得た。これも魯文に関する資料については紹介した。

ところが、これらの貼込帖に所収されている資料についての一点毎の目録は無いに等しく、かつ魯文の関係して資料だけを集めたものも見られないので、取り敢えず手当たり次第にページをめくって実見するしかない。ただ今回は偶然にも、東京都立中央図書館蔵特別文庫室蔵『鶏肋雑箋』という大部の貼込帖に魯文の報条を見出すことが出来た。この資料には多数の魯文の報条が貼付されていた。詳細については、すでに『大妻国文』53 号(2022 年 3 月)に発表した。

なお、この報条については、今迄に管見に入ったものを順次『大妻国文』で紹介してきたが、実見した 131 点については、同誌 54 号に一覧表としてまとめておいた。ちなみに、整版のみならず、明治期には活版の報条も見られ、報条というメディアの印刷法の変化を通底して、魯文が報条を書き続けている点も見落としてはならない。

さて、報条などは、文字通りの売文のために執筆されたもので(非文学テキスト)の最たるものであろう。しかし、考えてみれば小説の著述に際しても潤筆(原稿料)が支払われることから、文学テキストの執筆に就いても売文と見做すことができる。つまり、売文か非売品か、若しくは文学か非文学か、という区別自体が、実

は曖昧なものである。にも関わらず、従来の文学研究では決して対象になることのなかった分野の言説が、ここでいう非文学テキストなのである。いずれにしても、魯文に関わった文業の全貌を明らかにすることに意味があると思われる。

一方、俗謡に関する資料も少なくないのであるが、書誌事項の不明な小冊子が多く、所蔵の検索が困難であり、原本資料の蒐集が不可欠であるが、これも偶然に頼るしかない。また、「仮名読新聞」の雑報などは、既に「仮名読新聞」の複製が出されているので容易に参照可能であるが、同じ仮名読新聞社が明治11年に刊行を始めた六二連の『俳優評判記』には、魯文（猫々道人）が序文を寄せており、演劇に関する資料も見逃せない。なお、この『俳優評判記』は法月敏彦氏の校訂により国立劇場の「歌舞伎資料選書」9、10として解題翻刻が出されている。

浮世絵の填詞（解説）については、假名垣魯文記「〈画工一魁齋 | 名目一対競〉美勇水滸傳」（中錦五十番續、慶応2〜3年、近久板）などは序文を魯文が書いていて「假名垣魯文題」と明記されている。この様な揃物（シリーズ物）については比較的見つけやすいのであるが、ただ全部揃っている所蔵機関が分からないことも少なくない。それに対して、1〜3枚組の錦絵についてもデータベースに填詞者の名前が明記されていることは滅多になく、一点一点見ながら探すしか術はない。

以上のように、非文学テキストに関しては消費される媒体が多く、残存している資料そのものが少ないことと相俟って、所蔵する機関の書誌データの扱いが杜撰であることもあって、探すのが大変に困難である。だからこそ、管見に入った資料を一覧にして書誌事項や所蔵先、可能ならば本文の翻刻をしておくことは、今後の研究に資する物と思われる。順次、拙サイト <https://fumikura.net> で公開していく予定である。

最後に、19世紀末の文学史は整版から活版へというメディアの変遷にも配慮しつつ書かれるべきであることも、魯文の文業がこの期の多岐に渉る出版物に関わったことから、非文学テキストを含めた視野で考えていくことの有効性も、今回の研究課題から得られた成果の一端であると思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 高木 元	4. 巻 54
2. 論文標題 魯文の報条（補遺）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大妻国文	6. 最初と最後の頁 83-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高木 元	4. 巻 55
2. 論文標題 『貞操婦女八賢誌』 解題と翻刻（七）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大妻女子大学紀要 文系	6. 最初と最後の頁 49-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高木 元	4. 巻 53
2. 論文標題 魯文の報条（六）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大妻国文	6. 最初と最後の頁 129-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高木 元	4. 巻 54
2. 論文標題 『貞操婦女八賢誌』 解題と翻刻（六）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大妻女子大学紀要 文系	6. 最初と最後の頁 17-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 TAKAGI, Gen	4. 巻 Library Vol.77
2. 論文標題 The Creative Process	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Graphic Narratives from Early Modern Japan -The World of Kusazoshi- BRILL	6. 最初と最後の頁 84 ~ 117
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高木 元	4. 巻 1200
2. 論文標題 江戸読本の往方 (承前) カリフォルニアに眠る読本たち	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 國語と國文學	6. 最初と最後の頁 138-155
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

ふみくら https://fumikura.net Otsuma Women's University Repository https://otsuma.repo.nii.ac.jp/

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------